

## 佐藤誠教授，竹内隆夫教授，長須政司教授， ミッシェル・ワッセルマン教授のご定年にあたって

今年度、国際関係学部・研究科の教学・研究にご尽力されてきた佐藤教授、竹内教授、ワッセルマン教授、長須教授の4人の先生方のご定年を迎えられます。以下、4人の先生方のこれまでのご貢献への心からの感謝を込めて、各先生方の教育・研究の足跡をたどり、これを学部・研究科教学のより一層の充実に向けたかけがいのない糧とさせていただきます。

1988年の学部創設とともに本学に赴任され、四半世紀以上にわたって国際関係学部・研究科と歩みをとみにされた佐藤誠教授は、東京都立大学（現在の首都大学東京）人文学部を卒業後、新聞記者を経て、1987年に英国リーズ大学で博士号を取得され、アフリカをフィールドとする協同組合研究者として注目されるようになりました。

国際関係学部赴任後は、学部と大学院で演習を担当され、多くの有能な人材を日本や世界に送り出しました。専門では、アフリカ研究、社会開発論、国際人口移動論、さらに英語による *African Studies*, *Social Development* などを担当されました。ボルドー政治学院（仏）（集中講義「日本の政治システム」担当）やステレンボッシュ大学大学院政治学研究科（南アフリカ）（「日本の政治経済学」担当、2001年）など海外での教育経験も豊富です。

さらに、研究部長（2005～7年度）として立命館大学全体の研究力の向上に貢献されたのに加え、学部・研究科では、学部主事（現在の副学部長）、研究科主事（同）などを歴任され、今日の学部・研究科の教学の礎を築く上で大いに貢献されました。

研究面では『飢餓からの解放——南部アフリカの自立と協同組合運動』（芽ばえ社、1984年）に始まり、『アフリカ協同組合論序説』（日本経済評論社、1989年）、『新生南アフリカと日本』（共編、勁草書房、1994）；『南アフリカの政治経済学』（編著、明石書店、1998）；*Japan and South Africa*, coauthored, Ashgate, 2003, 『人間の安全保障』（共編、東信堂、2004）、*Protecting Human Security in a Post 9/11 World*, co-ed., Palgrave Macmillan, 2007, 『非営利・協同システムの展開』（共著、日本経済評論社、2008）、『移動と定住』（編著、同文館、1998）、『越境するケア労働』（編著、日本経済評論社、2010）、『英国学派の国際関係論』（共編、日本経済評論社、2013年）など、翻訳なども含めるとその著書は枚挙のいとまがないほどであり、分野も地域研究から協同組合・社会的企業論、マイグレーション研究、人間の安全保障論など多岐にわたっています。アフリカ研究や国際関係学の理論研究の重鎮として今後も、なお

一層ご活躍されることが期待されます。

やはり、学部草創期の1990年に赴任された竹内隆夫教授は、1972年に早稲田大学文学部を卒業され、神戸大学大学院文学研究科博士課程前期課程終了後、若くして、金城学院大学専任講師に就かれています。国際関係学部へ赴任後は、学部と大学院で演習を担当され、現地調査を重視した指導によって多くの人材を養成されました。とくに研究科の留学生の指導にあたっては、母国・地域の調査地に足を運んで、現状の理解と分析の方向性を指導されてきました。専門では、比較社会論や日本文化・社会論などを担当されたのに加えて、インターンシップの立ち上げに尽力され、インターンシップ先との交渉や実習の状況把握など制度定着に貢献しました。

さらに、学内行政への貢献について言えば、国際インスティテュート運営委員長として海外でのインターンシップ先の開拓に尽力されたのをはじめ、大学協議会委員、評議員、入試・総主査、総副主査、学部主事、大学院主事など重職を歴任されています。近年では、こうした豊富な役職経験を踏まえて、教授会や教学政策委員会の議論の舵取り役としての存在感を示されています。

研究面では、タイ東北地方の家族社会をめぐるフィールド研究を堅実に積み上げられてきました。その業績は、主なものだけでも、「東アジア・東南アジアの家族変動」北川隆吉監修『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門』[実証編]（文化書房博文社、2006年）、「タイの社会変動と東北地方住民の対応」（『立命館経済学』58巻5-6号、2010年）、「東北タイにおける稲作経営の変化」（『立命館国際研究』25巻2号、2012年）、「東北タイ農村の持続可能性—伝統とその変容から見えるもの—」（藤井勝他編著『東アジア「地方的世界」の社会学』晃洋書房、2013年）など多数に及びます。現在も日本社会学会、日本家族社会学会、日本タイ学会など7つの学会に所属、タイ東北地方の家族社会研究の第一人者として活躍されている。

2002年に国際関係学部へ赴任された長須政司教授も2013年度をもってご定年を迎えられます。長須教授は、1973年に海外経済協力基金（現：国際協力機構〔JICA〕）に務められて以来、30年間にわたって、開発途上国の開発プロジェクトの審査や調査を担当されてきました。その間、世界銀行と欧州復興開発銀行にも出向されたり、カンボジア政府に専門家として派遣されたりするなど、ひろく国際社会を舞台とする開発協力の第一線で活躍されてきました。世銀では、中南米に対する世銀借款を担当されましたが、余りに画一的な構造調整政策に疑問を抱かれ、批判的にこれを研究摂取されました。欧州復興開発銀行に転じては、中央アジア、とりわけキルギスタンの市場移行の支援に尽力されています。

国際関係学部へ赴任後は、こうした豊富な国際協力の現場での経験の理論化、とりわけ日本

の援助政策の決定要因や相手国の社会状況に応じた援助のあり方の理論化に取り組んで来られました。学部・大学院で演習を担当されるとともに、学部の専門科目では、「国際協力論」、研究科では「国際協力政策研究」や「南北関係論研究」、さらに英語による *International Cooperation* などを担当されてきました。学部役職では研究科主事などを歴任され、毎年のオープンゼミナール（学生主体の運営によって企業関係者を招いて秋に実施されるゼミ大会）では学生たちの良きアドバイザーとして活躍されてきました。

研究面では、国際機関での長年の実務経験を基礎に、「2つの市場移行改革」（『立命館国際研究 15 卷 3 号』立命館国際関係学会 2003 年）、「カンボジア経済の近況及び援助と投資の増大について」（『立命館国際研究 22 卷 3 号』2010 年）、「Challenge of Managing Donors in Cambodia: Review of the Process of Preparings the National Poverty Redecation Strategy’, *True Ownership and Policy Autonomy: Managing Donors and Owning Policies*, (edited by Izumi Ohno National Graduate Institute for Policy Studies Development Forum 2005/08), ‘Ownership in Cambodia: Review of process of preparing Poverty Reduction’ Strategy Paper 政策研究大学院大学 GRIPS ホームページ 開発フォーラム <http://www.grips.ac.jp/forum/pdf04/CAownership.pdf> 2004/11, など多数に及び、国際機関の実践経験豊かな「移行経済」の専門家としてその活躍が今後も期待されています。

1994 年に国際関係学部に着任して以来、20 年にわたって学部・研究科の教学の発展に貢献されたミッシェル・ワッセルマン教授も、2013 年度をもってご定年を迎えられます。1969 年にパリ大学文学部を卒業し、1978 年にはパリ第 3 大学大学院東洋学研究科で学位（博士）を取得されていますが、米国留学生活時の日本の伝統芸能（能）との出会いが、研究者でもあり、芸術家でもあるワッセルマン教授の今日に至る歩みを方向づけたとされます。

東京日仏学院専任講師、関西日仏交流館館長などを経て本学部に着任されて以来、フランス語教育を担当しながら、日本・西洋関係史（学部では日本語で、研究科では英語）や京都の芸術（学部、英語）等について講義を担当されてきました。学内役職面では、国際教育・研究推進副機構長（国際教育担当）をはじめとして、交換留学の実施と受け入れ校ネットワークの拡大に尽力されるとともに、立命館大学交響楽団顧問としても活躍されてきました。

研究面では、歌舞伎研究の分野で“Le mythe des quarante-sept rōnin”（「四十七士の神話」、共著：René Sieffert）, *Publications orientalistes de France*, 1981, “Arts du Japon : le théâtre classique”（「日本の古典演劇」、共著：René Sieffert）, *Publications orientalistes de France*, 1983, 近代日本における西洋音楽の受容を主題とする“Le tour du monde en 2000 *Butterfly* - La vie de Tamaki Miura, cantatrice japonaise (1884-1946)”（「蝶々夫人」2000 回世界一周 —日本人の歌姫三浦環の生涯（1884-1946）, *Le Bois d'Orion*, 2000 “Chants du

Japon”（「日本のうた」, 共著：河池智代）, *Notissimo*, 2002. “Le sacre de l’hiver - La Neuvième Symphonie de Beethoven, un mythe de la modernité japonaise”（「冬の祭典 — 日本の現代の神話としてのベートーベンの「第九」」, *Les Indes Savantes*, 2006）。さらにポール・クローデル研究に関連する “D’or et de neige – Paul Claudel et le Japon”（「金と雪 — ポール・クローデルと日本」, *Les Cahiers de la NRF*, Gallimard, 2008, “Claudel Danse Japon”（「クローデル・ダンス・日本」, *Éditions classiques Garnier*, 2012）など多様な分野に渡って重要な貢献を果たされてきました。

くわえて、立命館大学赴任後のワッセルマン教授の音楽・演劇活動は目を瞠るものがあります。1997年から2002年までは、京都コンサートホール特別専門委員として、Kyoto International Music Session 国際音楽祭の企画を担当され、オペラ演出家として、東京室内歌劇場や関西歌劇団等のために勤め、ジロー・オペラ賞を受賞し（1984）、2003以来現在まで京都オペラ協会総監督として勤められています。その他、日本国際文化研究所評議員（1997-2001）、京都コンサートホール運営企画委員（1995-現在）、長岡京記念文化事業団企画委員（2011-現在）も勤められ、研究者としてはもとより、芸術家としての多岐にわたる活躍が今後ますます期待されます。

グローバル化に対応して教学のより一層の充実が求められている国際関係学部にとって、学部・研究科の教学・研究に多大な貢献をなされてきた4人の先生方が退職されるのは、いかにも痛手であると言わざるを得ません。しかし、幸いにも、竹内先生、長須先生、そしてワッセルマン先生のお三方は、今後も特任教授として、引き続き立命館大学の教学に携わられ、佐藤先生も京都にそう遠くないご自宅を拠点に研究に専念されるとのことで、お目にかかってご指導いただける機会も少なくないものと期待しています。

どうか健康にはくれぐれも留意され、私たち国際関係学部教職員のよきメンター（Mentor）として引き続きご指導いただけるよう、心からお願い申し上げます。

2014年3月

立命館大学国際関係学部長 文 京 洸